



北方民族大学文库

日语助词「の」与

汉语助词『的』的对照研究

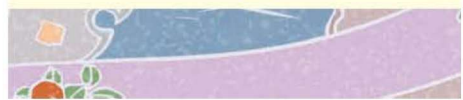
——从日语教育的视角出发

毛莉◎著

 河北
师范大学出版社









ISBN 978-7-5628-5278-0



9 787562 852780 >

定价：58.00元





北方民族大学文库

日语助词「の」与

汉语助词『的』的对照研究

——从日语教育的视角出发

毛莉◎著



华东理工大学出版社

· 上海 ·

图书在版编目(CIP)数据

日语助词“の”与汉语助词“的”的对照研究:从日语教育的视角出发 / 毛莉著. — 上海: 华东理工大学出版社, 2018.2

ISBN 978-7-5628-5278-0

I. ①日… II. ①毛… III. ①助词-对比研究-日语、汉语
IV. ①H334.2 ②H146.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2017)第 287582 号

策划编辑 / 王一佼

责任编辑 / 朴美玲

装帧设计 / 靳天宇

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

地址: 上海市梅陇路 130 号, 200237

电话: 021-64250306

网址: www.ecustpress.cn

邮箱: zongbianban@ecustpress.cn

印 刷 / 江苏凤凰数码印务有限公司

开 本 / 890mm×1240mm 1/32

印 张 / 7.25

字 数 / 214 千字

版 次 / 2018 年 3 月第 1 版

印 次 / 2018 年 3 月第 1 次

定 价 / 58.00 元

版权所有 侵权必究

序 1

本書の執筆者である毛莉氏は、大学院博士課程で私の下で学習した学生であり、「の」に関わる学習者の習得が困難であることに着目し、その問題を解決することを目的に研究課題とした。

日本語の連体助詞「の」に関わる中国語母語日本語学習者(以下学習者)の誤用は目立つものである。先行研究を精査した結果、日本語教育の視点から、学習者の誤用の原因を探り、日本語教育現場での「の」の指導法の提案を試みようとしたもので、日本語教育に寄与するもの大であると評価したい。

「の」に関する研究は、主に「の」の過剰使用(「美しい国」)の指摘を中心にした研究が従来から多くなされており、この誤用の原因は母語の干渉(「美丽的国」)であると指摘されることが多い。本論文では日本語の「の」と中国語の「的」の対照研究を通して、両者には対応するものと対応しないものがあることを明らかにしている。この多様な「の」の用法に基づいてアンケートを作成し、大規模な調査(中国の大学で日本語を主専攻とする1年生から4年生の学習者約1,000名余りを対象)を行い、誤用率の高いものとそうでないものがあることを明らかにしており、説得力をもつものと判断される。

アンケート調査から分かった誤用率の高いものを順次に論じている。まず「数量詞(名詞的)+の+名詞」の「の」用法である。数量詞については、ほとんどの教科書に「名詞+が+数量詞(副詞的)」(「学生が3人いる」)の形で提示されており、この誤用については教科書の提示にも問題があると指摘している。次に同格の「の」については、所属とされる「の」つまり「太郎の弟」は中国語でも「的」を用いることがあるが、「弟の太郎」という同格「の」は、数量詞と

同様、中国語では「的」が入ることがない用法であり、学習歴に関わらず誤用率が下がらないことも問題となる。教科書の提示においても、学習者に同格の「N1のN2」を「N1N2」との違いに言及しつつ理解させる必要を述べている。

次に「ナ形容詞」(*「有名の人」)については、「イ形容詞」に比べ、なぜ誤用率が高いかということに注目し論じている。問題として「名詞」との近似にあると指摘している。また近年、日本でも「子供な私」「ワインな気分」などのように、「ナ」を名詞に付け、帯びた状態や性質を表す表現が見られることもさらに混乱を招いているとし、「名詞」と「ナ形容詞」の両方の品詞を持つ語(自由の女神/自由な女神)のみでなく、このような使い方もさらに習得を難しくしていると指摘している。

「が」「を」からの「の」の誤用については、日本語の助詞は役割により分類され、その使い方は学習者にとって複雑で習得しにくいものの一つであるとし、「動詞連体形+名詞」(子供 の/が 泣く声)と「動詞連用形+名詞」(子供 の/*が 泣き声)について論じている。教科書には「動詞連用形+名詞」の形についての分析的な説明がなく、その都度、新出語彙という形で提示されていることから「動詞連用形+名詞」という形は一つの名詞だと認識するだけではなく、その仕組みも修得させなければならないと指摘している。また「サ変動詞」についても「日本語を勉強する」と「勉強をする」と「日本語の勉強をする」とはどのような関連またはどのように区別するのかを日本語教育の現場で教える必要性を論じている。

最後に、「的」と比較しつつ「の」の連続使用を考察し、学習者の使用回避の理由は母語からの負の転移にあるとしている。日本語では、連体助詞の「の」で名詞と名詞をつなげ、「の」が連続する場合でもそれを省略できない。しかし中国語では、「的」が連続する場合、意味の理解を妨げない限り「的」の連続使用を避けようとするとし、この「的」を避ける傾向が学習者の「の」の連続使用に影響を与えていると論じている。以上のアンケート調査による「の」の習得の実態、及び教科書の分析をもとにした考察は、説得力があ

り、評価できるものであるといえる。中国で日本語教育に携わる毛莉氏は、中国の日本語教育現場における「の」の指導のあり方について、教科書の提示、初級の指導、習得しにくい「の」の項目、日本語での会話時の「の」の指導の四点を提案をしており、何れも妥当なものであると評価したい。

対照研究とアンケート調査により「の」の習得に関する学習者の問題点とその解決法を明確にさせた点は、中国の日本語教育への影響も大きく、言語研究及び言語教育への貢献ができるものと確信している。

足立さゆり
白百合女子大学元教授

序 2

毛莉提交给日本白百合女子大学的博士论文《从日语教育的视点看日语的「の」和汉语的“的”——以汉语母语日语学习者的偏误为中心——》要在国内付梓印刷,作为该论文答辩时的评委之一,我感到由衷的高兴。我想,这可能是国内第一部就日语的「の」和汉语的“的”进行系统对比的学术专著,无论是对汉日对比研究还是日语教学研究都有很大的参考价值。

日语中「の」的一个主要功能是作定语标志,大致相当于汉语中的“的”,可能因为如此,中国学生一般会觉得这个容易习得。但实际上,日语的「の」功能很多,不仅仅是表示连体修饰。鉴于此,学生的隐形偏误较多。毛莉博士的专著主要在于搞清楚这些偏误所在,以便对比研究和日语教学服务。

作者首先通过对比日语的「の」和汉语的“的”,厘清了两者的对应与非对应关系。在此基础上,通过大规模问卷调查,明晰了偏误率高的项目(即“数量词+の+名词”),并通过教科书分析,给出了其原因所在。

在专著的第四至第六章,作者依次分析了高偏误率项目。如和“的”不对应的表同位的「の」;和名词相关联的形容动词;从助词「が」「を」变化而来的「の」等。在第七章,作者通过和“的”对比,考查了「の」的连续使用,搞清了较集中日语学习者之所以采取“回避使用”的策略是源于母语的负向迁移。

基于以上实证研究之结果,针对日语教学,作者提出了针对教材的表述问题、对初学者的指导、关于难以习得的「の」的教授、日语会话课上对助词习得的指导等四点教学方略,均为真知灼见,对中国日语教学有较大的参考价值。

毛莉博士本科就读于西安外国语大学,毕业后去济南工作。她

本人向学心强,不久后赴日本留学,在国立山口大学取得了硕士学位。毕业后赴北方民族大学任教,工作四年后,考入东京久负盛名的白百合女子大学研究生院,师从著名日语教育专家足立小百合教授。在白百合女子大学良好的学风熏陶及足立教授的悉心指导下,她逐渐成长为一名优秀学者,只用了三年时间,这也是日本博士课程最短的修学年限,便取得了博士学位,实在可喜可贺。我清晰地记得毛莉博士的论文答辩是在2016年1月23日,那是大雪初霁的一个上午,五位评委均对她的论文给予高度评价。结束后,我询问她有何感想时,她说:“为了撰写博士论文,我这么多年春节就没回过家”,当时,我鼻子有些酸楚。是的,梅花香自苦寒来,有付出才能成功,毛莉博士的成功又一次证明了这个真理。

取得博士学位后,毛莉博士即刻回到了北方民族大学任教,因为那里有等待她的家人和学生。我希望毛莉博士今后能立足宁夏,为西北的日语教育事业做出更大的贡献。

西安外国语大学教授

中国日语教学研究会副会长 毋育新

2017年初冬于西外长安校区

自 序

日本語を教えるとき、学生に短文を作らせたり、文章を書かせたりすることがありますが、その際に文法の誤りとして、連体助詞の「の」の使い方の間違いが多く見られます。例えば、「①私は友達と一緒においしいのラーメンを食べました。/ 我和朋友一起吃了很好吃的拉面」「②この本は歴史本です。/ 这本书是历史书」のような誤用例が頻出します。この場合の「おいしいの」は、よく言われるように、中国人の日本語学習者に多く見られる形容詞と動詞の連体修飾用法の間違いです。つまり、中国語話者は「の」をつけすぎてしまう傾向があるのです。一方、②のような「の」が抜けてしまう間違いも少なくありません。では、中国人の日本語学習者は、なぜ「の」をつけるべきところで「の」を抜いたり、抜くべきところに入れたりするような間違いを犯すのでしょうか。そのような疑問を感じたことがこの研究を始める動機になりました。そして、以上のような誤用はいずれも中国語の「的」の影響を受けていると考えられるのです。

これまで「の」と「的」の問題は、時には対応している、あるいはしていないというふうに、さまざまな立場から論文のテーマとして扱われてきましたが、その根本的な「違い」に関しては、未だに解明されていないのが実情です。そして、日本語学習者に日本語の「の」を、どのように習得させたらよいかに関する研究は、全くの空白地帯であると言えます。

本書は、連体助詞「の」に関わる中国人日本語学習者の誤用について明らかにするものです。中国人日本語学習者にとって「の」の習得が困難となっている原因の一つは、教科書の説明が曖昧なところにあると考えられます。本書では日本と中国で作成された教

科書をそれぞれ分析し、日本語教育の視点から日本語の「の」と中国語の「的」の对照研究を行い、「の」と「的」の違いを明らかにした上で、教科書における「の」に関する説明はどのように工夫されるべきか、また中国語を母語とする日本語学習者に、どのように連体助詞「の」を提示したらよいかを探ってみました。さらに、中国人日本語学習者を対象に、「の」の運用についての実態調査を行い、現状の把握と課題の抽出も行いました。そして、今後は日本語教育現場での「の」の教授法についての対応策を検討してゆくつもりです。

さらに日本語教育において、日本語学習者に日本語文法をどのように教えるかという分析的なアプローチや、外国人の日本語学習者により実践的な日本語を習得させるための教授法についても研究したいと考えています。中国人が日本人とコミュニケーションを図るときに、助詞の間違いはしばしば起こる問題です。不適切な使い方をすれば、時には大きな誤解すら招きかねません。そこで、教科書の日本語と実際に使われている日本語の違いを研究した上で、より効果的な教授法を研究し、より実用的な教科書を作成することを目指したいと思います。そして、将来的にその研究成果を、言語学習環境設計やカリキュラムデザインなどの段階から組み込んでゆけば、さらなる教育的な示唆を得られることでしょう。

誤用に関しては、日本語教育現場では軽視されがちですが、誤った助詞の使い方は、文法的な誤りを犯すというだけでなく、時には人間関係にまでも深刻な影響を与えてしまいます。日本語教育において、目標言語がどのように使われているかを重視した教育は、今後より一層進められてゆくことが予想されるでしょう。そして、その研究結果を教育現場の改善に役立ててゆければ幸いです。

2017 年 12 月

毛 莉

目 次

第1章 序論	1
1.1 研究の目的	1
1.2 研究の方法	7
1.2.1 教科書の調査	8
1.2.2 アンケート調査	10
1.3 本研究の構成	15
1.4 先行研究	16
1.4.1 「の」に関するもの	16
1.4.1.1 日本語教育文法に見る「の」	16
1.4.1.2 「の」の過剰使用について	18
1.4.1.3 先行研究における問題点	21
1.4.2 「的」に関するもの	22
1.4.2.1 「的」の用法の概括について	23
1.4.2.2 「的」の分類と有無について	26
1.4.3 「の」と「的」の対照研究に関するもの	32
1.4.3.1 「の」と「的」の対応・不对応について	33
1.4.3.2 先行研究で触れられていない点	35
第2章 「名詞＋(の/的)＋名詞」を中心に	37
2.1 問題提起	37
2.2 「の」と「的」に関する対照研究	38
2.3 教科書における「の」の提示	42
2.3.1 中国で作成された教科書(『新編日語』『総合日語』 『中日交流標準日本語』)	42

2.3.2	日本で作成された教科書(『初級日本語』 『日本語初歩』『みんなの日本語』)……………	44
2.4	中日の辞書における「の」と「的」……………	48
2.4.1	中国語の辞書における「的」の説明……………	49
2.4.2	日本語の辞書における「の」の説明……………	50
2.4.3	中日の辞書に見る「的」と「の」……………	52
2.4.4	中日における辞書に提示される「的」と 「の」の共通点と相違点……………	53
2.4.4.1	「的」に関するまとめ……………	53
2.4.4.2	「の」に関するまとめ……………	54
2.4.4.3	「的」と「の」の共通点について……………	55
2.4.4.4	「的」と「の」の相違点について……………	56
2.5	中国語と日本語の対訳に現れる「の」と「的」……………	57
2.5.1	「の」の必須に対し、「的」の準必須……………	57
2.5.1.1	N1(人)+N2(物)……………	58
2.5.1.2	N1(人)+N2(抽象名詞)……………	59
2.5.1.3	N1(人の体)+N2(N1の部分)……………	60
2.5.1.4	N1(時・場所)+N2(人・物・組織 集団・場所・抽象名詞)……………	61
2.5.2	「の」の必須に対し、「的」の省略……………	63
2.5.2.1	N1(人)+N2(人:人間関係を表す)……………	63
2.5.2.2	N1(人)+N2(組織集団)……………	64
2.5.2.3	N1(組織集団)+N2(人:職業も含む・物) ……………	65
2.5.2.4	N1(動物・物・場所)+N2(N1の部分)……………	66
2.5.2.5	N1(内容・固有名・材料・抽象名詞など) +N2(物・抽象名詞など)……………	67
2.5.3	「の」の必須に対し、「的」の不要……………	69
2.5.3.1	N1(数量・序数)+N2(人・物・時・場所・ 組織集団・抽象名詞)……………	69
2.5.3.2	N1(人:N2と同一関係)+N2(人)……………	70

2.5.3.3	N1(場所・物)+N2(N1との位置関係)	71
2.5.4	「の」の連続に対し、「的」の連続回避	72
2.6	まとめ	74
第3章	「数量詞+の+名詞」と「名詞+が/を+数量詞(副詞的)」	77
3.1	「数量詞+の+名詞」に関する研究	77
3.2	アンケート調査から見る「数量詞+の+名詞」	81
3.3	中国の大学で使用されている教科書から見る 「数量詞+の+名詞」	84
3.4	「数量詞+の+名詞」と「名詞+が/を+数量詞 (副詞的)」の違い	88
3.4.1	会話場面での違い	88
3.4.2	表す意味の違い	92
3.5	まとめ	94
第4章	日本語教育における同格の「の」の扱い	95
4.1	はじめに	95
4.2	同格の定義について	98
4.3	教科書に提示される同格	100
4.4	同格の形式	105
4.4.1	「N1のN2」	105
4.4.2	「N1というN2」	108
4.4.3	「N1N2」	110
4.4.4	「N1のN2」と「N1N2」	111
4.5	終わりに	120
第5章	「名詞」と「ナ形容詞」を中心に	122
5.1	はじめに	122
5.2	活用から見る「名詞」と「ナ形容詞」	125
5.3	教科書に現れる「ナ形容詞」	127

5.4 「名詞」と「ナ形容詞」の境界線	131
5.4.1 「ナ形容詞」も「名詞」も両方の品詞を持つ語	132
5.4.2 「ナ形容詞」の名詞的扱い方について	134
5.4.3 「名詞」のナ形容詞的扱い方について	136
5.5 終わりに	137
第6章 「の」から「が」「を」への誤用	140
6.1 はじめに	140
6.2 「が」「を」から「の」に	142
6.3 「の」から「が」への誤用について	143
6.3.1 アンケートから見る誤用	143
6.3.2 「の」より「が」を好む	144
6.3.3 教科書の説明不足：（動詞活用形）に後接する表現 形式において	146
6.3.4 「動詞連体形＋名詞」と「動詞連用形＋名詞」	148
6.4 「の」から「を」への誤用について	151
6.4.1 アンケート調査のデータから以下のことが 考えられる	151
6.4.2 「～を他動詞/他サ変動詞」から見る誤用の 可能性	153
6.4.3 「動詞連用形」から「名詞」に	155
6.4.4 「動詞連用形」に関連する複合語	156
6.5 終わりに	158
第7章 「N1のN2の…のN」の形から見る「の」と「的」	159
7.1 はじめに	159
7.2 教科書における「の」が連続する場合の説明	160
7.3 アンケート調査のデータに見る「の」と「的」	162
7.4 中日相互翻訳から見る「の」と「的」の違い	167
7.4.1 日本語の「の」が複数出の場合に、中国語の 「的」が中心語の前につく	168